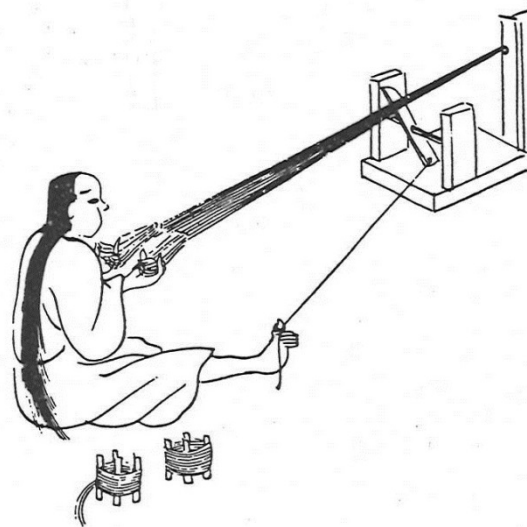


組紐の歴史

くみし 組師

糸を組み合わせて紐を作る職人を「組師」あるいは「組打」「紐屋」ともいう。組紐の用途は広く、武具、馬具、仏具や調度品の他に、近世では、具足の緘糸、柄糸、帯締、羽織の紐などにも使用された。

『七十一番職人歌合』の「組師」図は、足打台を使って何本かの糸を、それぞれ両手に持って捌いて綾を取り、右足の親指に絡ませた紐で木刀（きがたな）を動かし、組目を詰めている様子が描かれている。足打台とは、組紐を製造する手組道具の一種であるが、能率も悪く場所もとるので、近世以降は廃れたようである。代わって、低台・内規台・高台・綾竹台・平籠台など、比較的簡便な手組が多く使われている。



（『新日本文学大系 6 1』「七十一番職人歌合」（1500 年頃成立）より抜粋）

ループ組紐技法「クテ打」

1980 年代に、木下雅子氏が「止戈枢要（しかすうよう）」〔黒羽藩（現栃木県）第 11 代藩主大関増業（おおせき ますなり）撰〕に記載されていた秘伝技法を解説し、明らかにした組紐の製作技法。この技法は、正倉院の組紐に見られるように古代にさかのぼり、平安・鎌倉期には他に見られない発展をとげたが、その後徐々に衰退し、明治以降は忘れ去られていた。なお、「クテ打」の名称は、木下氏が江戸後期の記録中に見出される名称の一つをとったものである。

（参考文献：『クテ打組紐技法入門』木下雅子著 クテ打組紐技法研究会 編纂・発行 2010）